

## 研究・調査報告書

分類番号	報告書番号	担当
C-52C	22-304	慶應義塾大学 加藤眞三
<b>題名 (原題/訳)</b>		
Association between self-assessed preoperative level of physical activity and postoperative complications - An observational cohort analysis within a randomized controlled trial (PHYSSURG-C). 自己評価による 無作為化比較試験 (PHYSSURG-C) における観察コホート解析。 ランダム化比較試験 (PHYSSURG-C) における観察コホート解析。		
<b>執筆者</b>		
Onerup A, Angenete E, Bock D, et al		
<b>掲載誌</b>		
Eur J Surg Oncol. 2022 Apr;48(4):883-889. doi: 10.1016/j.ejso.2021.10.033. Epub 2021 Nov 2.		
<b>キーワード</b>		<b>PMID</b>
大腸がん、身体活動、術後合併症、回復		34742613
<b>要 旨</b>		
<p><b>はじめに：</b> 身体活動は、大きな手術後の術後回復の修正可能なリスク因子として示唆されている。我々は、自己申告による余暇の身体活動と術後の合併症および回復との関連を、集団レベルでさらに明らかにすることを目的とした。</p> <p><b>材料と方法：</b> ランダム化比較試験内で観察コホート解析を行った。20歳以上の大腸がん患者が対象となった。2015年1月から2020年5月の間に761人の参加者を募集した。余暇の身体活動は4段階評価で自己評価した。本解析における主要アウトカムは、comprehensive complication index (CCI ; 包括的合併症指標) を用いて測定した90日以内の術後合併症であった。副次的転帰は、指標となる入院期間のCCI、術後30日のCCI、特定の種類の合併症、入院期間、および自己評価による身体的回復であった。解析は、性別、年齢、研究施設、飲酒、腫瘍の病期、結腸直腸癌、ネオアジュバント療法、開腹手術または腹腔鏡手術で調整した。</p> <p><b>結果：</b> 614人の参加者について術前の身体活動に関するデータが得られた。何らかの身体活動を報告した参加者は、座ったままの参加者よりも術後90日のCCIが平均して低かった(オッズ比0.63、95%CI 0.43-0.92)。入院中および30日以内の合併症についても同様のパターンが示された。いくつかの種類の合併症、再手術、入院期間については身体活動により低リスクになる傾向がみられたが、統計的有意差がみられたのは呼吸不全であった。</p> <p><b>結論</b> 身体活動的な参加者は術後合併症が少なく、このことはこの情報が予後予測に有用であることを示唆している。一般住民の身体活動増加のための活動は継続すべきである。</p>		